

ユゴー短篇「クロード・グー」について

——作中人物とそのモデル——

店 村 新 次

ヴィクトル・ユゴーに「クロード・グー Claude Gueux」という短篇小説がある。手許の版でもわずか三十六頁にみたない一種の実名・実録小説で一八三四年に公やけにされた。「ノートルダム・ド・パリ」に遅れること三年、「レ・ミゼラブル」に先立つこと二十八年（但しユゴーは一八四五年頃からレ・ミゼラブルの筆を起している）、ユゴー三十二歳の年である。因みに小説の分野でのそれまでの作品を挙げると次の通りである。

- 一八二三年 氷島のアン Han d'Islande
- 一八二六年 ビュグ・ジャルガル Bug-Jargal
- 一八二九年 死刑囚最後の日 Le dernier jour d'un condamné.
- 一八三一年 ノートルダム・ド・パリ Notre-Dame de Paris.
- 一八三四年 クロード・グー Claude Gueux.

ユゴー短篇「クロード・グー」について

右に挙げた小説作品の内容上の推移変貌はそのまま当時におけるユゴーの思想上のそれをよく表わしているばかりでなく、七月革命をはさんだ当時のフランスの事情をも反映していて興味がある。しかしそのことについてはいはずればど触れることとし、ここでは「クロード・グー」なる小説そのものの分析に主眼をおくことにする。つまり実際にあった事件の公判記事を基礎にして書かれたこの死刑囚の死後の弁護とも法廷小説とも言われている短篇が、どのような出来栄を示しているか、モデルと小説とがどのように異り、またどのように似せられているかを調べ、出来ればそこからユゴーの制作上の意図やその小説作法にまで及んで見たいと思うのである。

この小説は本邦ではまだあまり知られていないので、まずそのあらすじを紹介することにする。

パリに住むクロード・グーという貧しい労働者が仕事にあぶれて盗みをする。五年の懲役を言い渡されクレールヴォー監獄に送られて作業に服する。この作業場の監督が融通のきかぬ頑固者である。クロードはいつのまにか囚人仲間の信望をあつめるようになる。クロードには一つの弱みがある。大食漢で配給食だけでは足りないのだ。常に空腹に苦しむ。ある日アルバンという若い囚人が配給食の半分を分けあうようになり、二人は固い友情に結ばれる。監督は囚人たちにしたわれるクロードを妬み、クロードとアルバンの仲をさくためにアルバンの配置がえをする。クロードは監督にアルバンをかえしてほしいと頼むが聞き入れられないばかりか、率にとじこめられたりする。隠忍の末クロードは心中みずから監督を裁き、自分の命を犠牲にしてこれを死刑に処する決心をする。囚人たちを集めて彼はその決意を披瀝し皆の意見をとう。粛として皆は一言もない。やがて点呼のために監督がまわってくる。クロードは最後にもう一度アルバンを返してくれと切願し、それが断られるとかくし持った斧をふるって監督を殺し、鍔のみずからの心臓をつくが死にきれない。クロードは法廷に立たされる。論告と弁護が法廷とよばれる一種の競技場で型のごとくおこなわれるが、ここでクロードは感動的な雄弁をふるって、自らの罪をはっきり認めると同時に次のように言う。

「なんでですって？ 挑発行為がなかった？ ああその通り、それは正しい。いま一人の酔っぱらいが私に拳固をくわせるとする。私はその男を殺す、私は挑発されたのだ。情状酌量の余地がある。ところで酔っていない理性を有する一人の男が四年間毎日毎時毎分私の思いがけぬところをつきささいなむ、盗みの原因になった妻のことで、子供のことで、私をはずかしめさいなむ、私から友とパンとを奪いとる、友を返せといえば率にぶちこみ、私が苦しいと言をばうるさいという。こんな時にどうしろというのだ。私は彼を

殺す。ざまはない。挑発行為はなかったのだ。あなた方は私の首を切るといふ。切るがよい！」

「ただ次のことだけ申しあげたい、私は泥棒で殺人犯です。私は盗みをし人を殺したのだから。だが、なぜ私が盗みをし、人を殺したのか。陪審員の皆さん、この二つの疑問を考えて下さい」

クロードは処刑の日、ある特志の修道女にもらった金貨をにぎって断頭台に上る。「貧しい人々に」と首切人に金貨を渡した殺那彼の首は胴から切りはなされる。

以上が物語のあらすじであり、この後にユゴー自身の批判が力をこめて展開する。それはよく言われるように死刑囚クロード・グーに対する死後の弁護の形をとっており、王制主義者から社会主義者に変身せんとする詩人の社会・政治批判でもある。

「……クロード・グーの生涯に二つの大きな標題でわけられる。「失墜以前」と「失墜以後」。そしてこの二つの標題のもとに二つの問題が横たわる。教育の問題と刑罰制度の問題、これである。しかしてこの二つの問題のあいだに社会全体の問題がある。……クロード・グーを見るがよい。頭もよく心も正しい。ただ運命のいたずらが彼をどのようににますい階層においた。そしてそのために盗みを働いた。すると社会はどのようににますい牢獄に彼をほりこんだ。そしてそのため遂に人を殺めるに至ったのだ。本当に罰せらるべき者は誰なのか。彼であろうか、我々であろうか？」

ユゴーはこのように彼一流の二元論的でシメトリックな発想法で、当時のフランスにおける教育制度の不備と刑罰制度の苛酷さに問題をしばっている。これはやがてレ・ミゼラブルで彼が再びとりあげるテーマである。(それにしてもジャン・ヴァルジャンとクロード・グー、ジャヴェールと作業場監督とはなんと酷似していることか)そしてこうした社会のゆがみに眼をそむけて、情眼をむさぼっている為政者たちに強く呼びかける。

左派の諸君、右派の諸君。諸君が共和制と叫び王制と叫んでいるあいだにも一般大衆は苦しんでいるのだ。これこそが真実なのだ。民衆は飢え凍えている、貧困は男を犯罪に、女を墮落においやる。刑務所に息子をとりられ、淫売宿に娘をうばわれてゆく大衆を憐ん

ユゴー短篇「クロード・グー」について

で頂きたい。囚人と淫売婦があまりにも多すぎるのだ。この二つの社会の濃腸は何を証明するか。社会という体の血の中に悪が流れているのだ。諸君はこの病人の枕頭に医者として集った人々だ。医者は病氣のことに専念して頂きたい。この病氣に対する諸君の治療法はまちがっている。諸君のつくる法律は一時おさえの葉、諸君の法典の半分はまにあわせの処方箋、他の半分はいかさま療治なのだ。即ち烙印は病人の傷口をえそにする焼灼療法……牢獄は病人からすいだした悪血を一そう濁らせてそのまままた吸収させる発泡済、……死刑は野蕃な外科切断術だ。……諸君の刑罰制度を諸君の法典を、諸君の監獄を諸君の裁判官をつくりなおして頂きたい。

と刑罰制度の不備を論じ、

諸君、フランスでは毎年あまりにも多くの首が切られすぎる、諸君が節約を論ずるといふのなら、この方面でも節約をやって頂きたい。諸種の廃止に力を入れるといふのなら、死刑執行人を廃止して頂きたい。八十人の死刑執行人の給料で六百人の学校教員の給料が払えるのだ。

と死刑廃止論をとなえる。この死刑廃止論は五年前の「死刑囚最後の日」以来一貫したユゴーの主張である。ついで教育制度の充実を論じ、

一般大衆に想いをほせよ。子供たちには学校を、大人には仕事場を与えよ。フランスがヨーロッパでも読み書きのできる者の最も少い国の一つであることを御存知であろうか。スイスもベルギーも……しかるにフランスは文盲なのだ。これは恥辱である。……下積みの者たちの頭、この中には有益な芽が一杯に蔽われている。大道で人を殺した者とても、もしよりよく導かれたならば、最もすぐれた町の功労者となったかも知れないのだ。その頭を開拓し灌漑し肥沃にし啓発し善用せよ。そうすればその頭を切りおとす必要はなくなるのだ。

という文盲退治論でその社会批判を結んでいる。因みに、刑法改正の問題は当時の法律家も論議しており、監獄もフィラデルフィア法式にするかオーバン法式を採用するかなどいふ問題が論ぜられていた。また教育制度の改革もサン・

シモニアンがユゴーと同様の意見をとなえていた。

クロード・グー事件は実際にあった事件で、当時はもとより、その後も屢々問題にされて来たものである。現にクロード処刑の百周年目にあたる一九三二年には二つもの論文が発表されているし、(P. Buffères: Le centenaire de Claude Gueux, dans l'Ordre du 25 mars 1932. 及び R. Escholier: Du nouveau sur Claude Gueux, Annales du 20 décembre 1932) その間にも多くの人がこれをとりあげて論じている。トロワ (Troyes) ではクロードの話は一つの伝説になっているとさえ言われる。勿論この事件がそのように人々の興味を誘ったのは、ユゴーのこの小説がその大きな原因の一つになっているのは事実である。クレールヴォー刑務所に起った実際の監守殺害事件の発生は一八三一年一月七日(小説では四月)死刑公判は一六日、死刑執行は六月一日(金)の朝八時(小説では八月)トロワの広場で行われた。処刑が習慣にさからって土曜(市日)を避けたのは民衆の暴動を警戒したためと言われる。

ユゴーはこの公判に直接臨んだわけではない。彼はパリにいて Gazette des Tribunaux という新聞によりこの事件の詳細を知った。処刑の日附の食い違いなどはこれによる。新聞には処刑の日を Vendredi dernier とだけ記してあったので一週間の食い違いが出来たのである。なおこの新聞は当時の作家が種々がしによく読んだもので、スタンダールも「赤と黒」に、バルザックも「ペーテル事件についての覚書」に利用しているらしく、ユゴー自身、それより五年前、前記の「死刑囚最後の日」につかう資料を得ているし「レ・ミゼラブル」の資料もここから得たものである。ユゴーはこの新聞のことは秘しているようだが、原稿の余白に記された文字から、彼の拠ったのが一八三二年三月一九日・四月一日・六月一五日の Gazette 紙であることが推定されている。この他にも「あらずじ」に於いて述べた「金貨をくれた修道女」ルイーズと、オーブ裁判所書記ミローの手紙をユゴーが持っていることが Victor Hugo raconté par un témoin de sa vie などによってわかるが、これらを参考にはしてもあまり利用した形跡がない。主に Gazette 紙に拠

ユゴー短篇「クロード・グー」について

っていると見てよいようである。彼がこの公判記録に惹きつけられたのは無理もない。「死刑囚最後の日」を書いた彼はそれを補足し完全なものとするためにもこれを取り上げたかっただであらう。彼は Victor Hugo raconté …… の中で

Claude Gueux n'est que la suite du Dernier jour d'un condamné

と記している。(Chap. LI)

ユゴーは一八三二年九月頃にこの仕事に手を染めているが、数枚の断章をものしただけで一八三四年六月まで筆は進まなかった。だがその間にクロードについての調査を進めていたものと思われる。前記の裁判所書記の手紙が一八三三年のものであることもこのことがわかる。三四年の六月二日から二四日までの五日間でこれを書き上げると、恋人のジュリエット・ドゥルエを伴ってモンマルトルの丘に上り、それを読んで聞かせたという。このように脱稿を急いだのは、掲載予定の *la Revue de Paris* 誌が七月初旬に出ることになっていたためである。

この短篇が一般読者の間に捲き起した反響の大きさは、ある無名の一読者が単行本として刊行するための費用負担を申し出て、それを一冊ずつ代議士全員に配って欲しいと申し出て来たという逸話でも知ることができる。しかし各新聞 (*Gazette des Tribunaux* も含めて) や当局者たちはあまりこれに触れなかったようである。だが雑誌 *France Littéraire* は

L'histoire de Claude Gueux est une page magnifique …… Quand l'humanité se met en marche, c'est au génie qu'il appartient de porter le flambeau devant elle ……

との賞讃の辞を述べている。

だがユゴーのクロード・グーが、そしてクロード・グー事件というものが本格的に論議され出したのはユゴーの死の直後から、つまり作品発表から五十年もたった一八八六・七年頃からである。おもうに、大詩人の生前には控え目にし

か出来なかつた諸種の批判が、死後俄かに勢を得て、ユゴー是非の問題とからんでこの小説も亦あらたなる脚光をあびるに至つたものであろう。およそユゴーほど毀譽褒貶の極端で甚しい作家はないのであって、Anti-Hugo の批評家たちはまるで不倶戴天の敵にでも対するように、齒をむき出さんばかりにして襲いかかり、あるいは家系をしらべて狂人ではなかつたかと言ひ、あるいは子供の頭脳を持った大きな大人とののしつて、なんともして叩きつけ引きずり降さねばおかぬ氣勢を見せるのである。これは現在でも同じことであり、アラゴンがユゴーこそ小人どもの近づくことの出来ぬ大なる森であり、その悪口をしゃべりたてる群盲どもはその森に宿つて囀ずる小雀たちに過ぎないと力をこめて賞めちぎつても無駄である。La question de Hugo はどこまで行つてもきりががない。有為転変を重ねた八十一年の巨人の生涯は、汲めども尽きぬ泉であると同時に、叩けばほこりも大いに出るのである。その毀譽褒貶の雛形を我々はクロード・グー批判の中にも見るであらう。

この短篇に対する批判の焦点は次の二つの点にあわされる。一つはこの小説にかけるユゴーの社会批判、もしくは社会改革論の生温るさであり、他の一つは実説クロード・グーと小説クロード・グーとの違い、つまり真実性の問題である。前者は作者の思想上の問題であり、後者は作家としての小説作法上の問題である。そして勿論この二つの問題は切りはなせない相関々係を有する。前者は非常に重要な問題である。しかしそれは本稿で主として取りあげる問題ではなかつた。後者を論ずるに際して併せて述べるべきことである。又批評家たちの論争も前者よりは後者に重きをおいている。というの、一八三四年という年を考え、そして「死刑囚最後の日」を経てようやくユゴー的社会主義なるものに脱皮をはじめたばかりの作者をつかまえてこれを追求することは酷であり、むしろ作者が真摯に訴えるその痛烈な叫びは、たとえそれがユトピックな社会主義に終つていても、それはそれで充分であり傾聴すべきものであることを知っているからである。しかし後者に対しての批判は敵しいものである。一八八七年エドモン・ビレ(痛烈なアンチユゴーの批評家)が小説クロード・グーが実説クロード・グーはおろか、ユゴーの抛つた Gazette des Tribunaux の記事とさへ食い違つ

ていることを指摘して、作者を文書偽造家だと酷評しているのを皮きりに、数多の「実説クロード・グー研究」が続出するに至ったのである。

では如何なる点でユゴーのクロードは本物のクロードと異り、実際にあったこの事件を彼の想像力はどのように変形しているのか、そしてそれを我々はどう理解したらよいのか、この問題を次に考察したいと思う。それには二段構えの調査が必要である。即ち一つは、ビレが指摘しているように、ユゴーの拠った *Gazette des Tribunaux* の記事に見られる被告ならびに事件についての真相と小説に見られるそれらとの比較。もう一つはその後の種々の研究家の調査による実説クロード・グーとの比較である。当時の新聞記事にしろされた被告の性格や事件の動機経過と、その後詳かにされた事の真相とか全く同じであるとは限らないし、又それなればこそ多くの研究がなされた訳であるからである。ところでユゴーの執筆の契機となりその重要なデータともなった一八三二年の新聞を現在入手することは困難なことである。

しかし幸いにも P. Savey-Cassard と同人が、Victor Hugo : Claude Gueux, édition critique の中に Appendice としてこれら当時の新聞記事をそのまま収録してくれている。ただ残念なことに一八八七年一月二五日 *l'Univers* 誌上に発表されたビレの酷評の記事は諸種の研究書によって部分的にしか知ることが出来ない。しかし *Gazette* の公判記事さえあれば何もビレの言を聞かずとも、それと小説を比較するだけで十分に目的を達せられると思うし、私には私なりの見方が許されるのであるから、以下ユゴーの取材の源泉となった *Gazette* の一八三二年三月一九日、四月一日、六月一五日の記事と小説を比較しつつ、一方もう一つの実説クロード・グーなるものをも同時に併せ考えて行きたいと思う。

ところでこの比較をするに当って、最初に問題を大きく二つの点に分けて見たい。まず第一は作中人物の風貌や性格そのものについてである。凡そ小説を書きそれに一貫した内容を盛るためには人物の設定がまず重要な問題であろう。ユゴーが設定したクロードなる人物と、新聞記者の見たそれと、世間に噂されていたそれとはどのように違ひどのようなに似ているであろうか。第二にはクロードの犯した殺人事件の動機と経過である。囚人が看守長を殺害すといふことは

何時の時代、何処の国においてもやはり重大事件であり、しかもそれに対して読者の共感を得るように書くためには、その動機が誠に人を納得せしめるものでなければならぬ。小説では「あらずじ」で述べたような動機ということになっている。実際はどうであつたらうか。この二点である。ここでは紙数の関係上前者に問題をしばって見たい。

まず人物についてであるが、この点が批評家のとりわけ激しく攻撃するところである。ロマンチック作家の手になる小説の登場人物はどうしても作者の意図に従つて変形される傾向が強いのであるが、この小説でも作中人物が実際とは大分違った風に描き出されているのである。この小説の主人公は勿論囚人クロード・グーであるが、重要な脇役としての人物が敵役の作業場監督 M・D(本名は Duval)で実際は作業場主任ではなく看守長であつた、それに事件の誘因となる二枚目役の囚人アルバンである。この三人の他に修道女と僧と裁判官と死刑執行人が登場するが殆んど重要性はなく、それより大切なのは「その他大勢」として無言の役割を演じている一群の囚人達である。まずクロード・グーであるが、作者は冒頭において次のような説明でこの主人公を提出する。

今から七・八年前バリーにクロード・グーというあわれな労働者が住んでいた。情婦と子供をかかえていた。……腕もあり器用で頭もよかつた。教育というものからはまったく見放されながら、天性には至つて恵まれた方で、読み書きは出来ないが、考えること出来る男だつた。

そして投獄されてからの主人公について、

昨日の誠実な労働者から今日は盗人となつたクロード・グーは重々しさと深みのある顔付きをしていた……

としている。つまりユゴーの設定したクロードは貧しくとも誠実な労働者ということが登場するのである。しかしこれは実際とは大變に違つている。作者が扱つた新聞記事にも

..... On sait que Claude Gueux n'est pas un criminel vulgaire, que déjà deux fois il a été détenu pour crime à Clairvaux, que déjà en 1828 il a tenté d'assassiner le malheureux gardien à l'aide de son propre sable. On sait que depuis son arrivée dans les prisons de Troyes, Claude Gueux a dirigé un plan d'évasion aussi hardi qu'habile, que cet homme qui semble jouer au crime et n'y chercher que la célébrité a le même jour menacé de tuer ses juges sur leur siège et livré de son propre mouvement un couteau échappé à toutes les recherches (Gazette des Tribunaux du 19 Mars 1832: Cour d'assises de l'Aube (Correspondance particulière) Audience du 16 mars. Présidence de M. de Glos)

となつてゐるように、クロードは極悪な累犯者なのであり、クレールヴォー刑務所へ投獄されたのもこれが三度目、その間に看守殺害未遂も一度やつてゐる危険な人物ということになる。又クロードは労働者であつたことはなく、妻らしい者も子供もない一種の浮浪者であつたことが知られてゐる。それについて実説クロード・グーとして発表されてゐるところに従つてクロードの投獄以前の生活ぶりを概略見てみよう。

クロードの家系については余りくわしく解らないが、父親 Etienne Gueux については些か述べねばならないことがある。エチエンヌは一七五四年生れで、葡萄造りをしてゐたことになつてゐるが、實際は物乞い、こじぎと泥棒が本職であつた。そのため数回警察の厄介になつており一八三〇年十二月には遂にクロードと同じクレールヴォー刑務所に五年の刑で投獄されてゐた。息子と同時期に同じ監獄に入つてゐたわけで、その翌年の三月に息子のクロードにみとられながら牢死してゐる（このことは小説には出てこない）。母親については父親より二十歳も年若であつて父親より早く死んでゐるほか大したことは知られてゐない。八人の子供があつてクロードは次男で姉が三人、兄が一人、弟一人、妹二人となつてゐる。クロードは勿論教育を受けてゐない。これはユゴーの言う通りである。十三の年に故郷を捨てて車引き

の群に入ったが、この年に兄弟は全部ちりぢりになり、そしてクロードは第一回目の盗みを働いている。その後はマルセーユヤル・アーヴルで水夫になったと陳述でのべているが不確かのようなのである。十七の年にパリに来たことになっているが、実際は村から村へと乞食生活を続けていたらしい。啞の真似をするのが非常に巧みで、それで憐みを得て物乞いをし、その間にも盗みをしていた。一八二三年には五年の刑を言い渡されてクレールヴォーに入っている（この時にもやはり看守長は Delacelle であった。この事は重要なことである）この一八二三年から一八二八年の刑の終りにおいてクロードは問題の看守長ドウラセルと一度衝突を起し、危うくこれを殺しそうになっている。しかしこの事件は軽く納まって六ヶ月の徴役延長に止まり、一八二九年に出獄することが出来た。その後は沖仲仕をしたり放浪生活をしたりしていたが、その放浪の間に最後の盗み、つまり小説の筋の発端となる犯罪を犯したのである。小説では「仕事にあぶれ、飢えと寒さから妻子をまもるための盗み」となっているが、実際は全く違った性質のものである。

一八二九年九月の半ば頃、彼はサン・パンタレオン州のオータンという村で、ある農家に一夜の宿を乞うた。そして彼を受け入れたこの農家の馬を盗み出したのである。これを売って金を得んがためであり、このために累犯でもあり八年の刑を言い渡されて、一八三〇年三月にクレールヴォー刑務所に舞い戻ったのであった。クロードはここで又看守長ドウラセルと顔を合わせた。前のいきさつがあり両者には初めから衝突の危険性があったのである。それから二〇ヶ月の後に看守長殺人事件を起すのであるが、その間に彼より先に入獄していた父親の牢死があり、その後何回かクロードは脱獄を企てている。囚人たちはもとより看守もその粗暴と腕力を極度に恐れていたようである。

クロードがこのような人間であったことは確かである。以上は多くの学者が年月をかけて公判記録や関係者、その他クロードを知る者たちから刻明に調べ上げた結果大体一致して述べているところである。

次に脇役の人物の一人アルバン（本名 Albin Legrand）について。ユゴーの拠った Gazette には囚人アルバンについてのことあまり詳しく記されていない。で小説ではこのアルバンの風貌や性格、そしてアルバンとクロードの関係の

あり方が事実と大分相違して描かれている。アルバンをユゴーは

Un jeune homme, pâle, blanc, faible……

と書いて弱々しい子供のような人物として提出する。しかしユゴーの多分利用しなかったと思われる十二月二十四日の Gazette その他によると、実際のアルバンは背は低かったが恐ろしく精神的でむしろ動物的なほどたくましい体つきをしていたらしい。性格にも殺人を平気でやりかねないといった荒々しさがあり、変質者あるいは変態性慾者としての素質が見られたようである。現に、クロードが処刑されてから三週間後に、彼自身短刀で一人の囚人を殺している。そして牢の高所に登ってそこから身を投げ自殺を図ったが、これも死に切れなかった。彼の場合は巧く死刑を逃れて終身刑になったが、変質者としての嫉妬が原因であったようである。しかしこのアルバンがクロードに食事を頒ち与えたことは事実であった。ところで小説ではこのアルバンとクロードの関係が次のように描かれている。

Ils partageaient en effet de la sorte tous les jours. Claude Gueux avait trente-six ans, et par moments il en paraissait cinquante, tant sa pensée habituelle était sévère. Albin avait vingt ans, on lui en eût donné dix-sept, tant il y avait encore d'innocence dans le regard de ce voleur. Une étroite amitié se noua entre ces deux hommes, amitié de père à fils plutôt que de frère à frère. Albin était encore presque un enfant; Claude était déjà presque un vieillard.

一読してユゴー独特のシメトリックなそしてアンティテティックな対句的文章で一刀両断に二人の間柄を説明しているが、ここが大変に問題である。第一、クロードが三十七歳、アルバンが二十歳となっているのであるが、実際は二人は殆んど同年輩でクロードが二十七歳、アルバンが二十五歳であった。これは随分と思いきった虚構であると言わね

ばならない。このように二人の人物に年齢のひらきを作ったのには理由があるのである。ここには明瞭に小説家ユゴーの自覚した意図が感じられる。ユゴーはクロードを中年男としアルバンを青年に仕立てただけでは済まなかった。引用原文に見る通り、クロードは三十七歳だが五十歳に見えるほど老けており、アルバンは二十歳でありながら十七歳にか見えぬほど子供らしいと言っている。つまり中年男と青年では満足せず、老人と子供にまで引き離す必要があったのである。これは引用文の *amitié de père à fils plutôt que de frère à frère* という二人の愛情のあり方を納得させたかったからに他ならない。二十七歳と二十五歳では「父と子の愛情」は不似合いであり、どうしても「兄と弟の愛情」が想像される。ところがこの「兄と弟の愛情」を読者に想像させることは作者として避けねばならぬことであった。監獄内においての「兄と弟の愛情」、しかも殺人事件を起すほどの若い男同志の愛情はどうしても不純な関係を連想させがちであるからである。そして実際にクロードとアルバンはこの「不純な関係」で結ばれていたのであった。このことをユゴーが知っていたかどうかは明らかでない。ユゴーの扱った *Gazette* にはこの点が述べられていないからである。それはかりかクロードとアルバンの年齢さえも明確にしていない。であるからユゴーはこの点は全く知らずしてこのようにしたのかも知れないが、*Gazette* に述べられてないからと言ってそう断定することも出来ない。ユゴーは小説完成までには種々取材に努めているのであるから。そして二人の愛情について続けて

Ils travaillaient dans le même atelier, ils couchaient sous la même clef de voûte, ils se promenaient dans le même préau, ils mordaient au même pain. Chacun des deux amis était l'univers pour l'autre. Il paraît qu'ils étaient heureux.

と説明しているが、これは率直にこれを受けとるものには純粹に共感すべき個処であり、その後に来るべき大波瀾を準備するにふさわしい伏線ともなる個処であるが、些かこそばゆいような表現に感じられないこともない。ともかくこ

の点で作者がその愛情のあり方に不純なものを混えないよう、いかにも碎心していることが感じとられるのである。これは当然の作意と言うべきであろう。この事件に痴情問題や変態趣味をからませたのでは、作者の意図する弱者への弁護、ひいては社会批判の筆がもたつき、その効果もマイナスになるに違いないからである。もっとも看守長殺人の実際の動機はこの痴情によるもののみではなかったことは事実である。これはいずれ稿を改めて事件の動機と経過として取り上げる予定であるが、大体クロード・グー事件の動機なるものは今でも半ばは謎とされているのである。ユゴーの力強い筆致を以てしても、空腹と友情だけで看守長を殺害するには動機として不十分ではないかという感じが読後に残るのも無理はないのである。そして事実在即して痴情の問題を考慮しても、なお辻褄の合わぬ所が出て来る。ここで問題になって来るのは残された登場人物たる看守長、及びその他大勢としての囚人の群である。殊に囚人たちという群衆の持つ潜在的で恐ろしい力を無視しては、その中で生きていたクロードの心裡の動きを理解することは出来ないであろう。これについては別稿の動機及び経過を述べる際に触れるとして、最後に看守長ドゥラセルについてだけ考えて見ることにしたい。

ユゴーの小説の中で最もよく描かれているのはこの作業場監督M・Dではなからうか。

小男の癖に一徹者で自説をまげること知らず、何時も自分の権力にかけては一步も譲らなかつた。もつとも時と場合では愉快で気さくなところもあり、陽気に冗談の一つも言うが、手厳しいというよりは強情で、誰とも、いや自分とさえおりあうということがなかつた。恐らく家ではよい父よい夫でもあつたらう——だがこれは義務であつて美德ではない。一言で言えば悪人ではないが嫌な人間だつた。……どんな思想の衝動にもどんな感情との接触にも共鳴しない男……そして頑固を自慢にして自分をナポレオンになぞらえたりしていた。これは錯覚にすぎない。世の中にはこの錯覚におちいる人が少くない。頑固と意志の強さを混合し燈火を星と見間違はえるのだ……世の中にはみずからを撰理と信するごうした小さな宿命的な頑固者がうようよしているのだ……

本物のドゥラセルがどんな人物であつたか、これについては Gazette 紙は勿論、公判記録などにも殆んど語られてい

ないようである。彼について詳細に知ることは難かしい。又彼が囚人たちにどのように手厳しかったかもよくは知られていない。ただ彼の死が囚人たちを大喜びさせたことは事実のようである。そして彼がクロードとアルバンの仲をさうとしたのも事実であるが、それには前述したような二人の「不純な関係」があったことも一つの理由であったようである。このことについては殺人の動機を述べる機会に触れたいと思う。ともかくユゴーはこの人物を彼の想像力によって作り出したものと思われるが、小説の中では言葉少ないながら、非常に巧みに描かれていると思う。そしてクロード・グーがジャン・バルジャンに似ているとするならば、この監督はジャヴェールに酷似していると言える。(ユゴーはこの小説を書いている時、既にレ・ミゼラブルのモデルたる Pierre Maurin 事件の取材をはじめていた)即ちジャン・バルジャンを追究するジャヴェールとクロードを圧迫しようとする M・D は共に権力の象徴・権化として描かれているのである。自分に与えられた権力を絶対と考え、自らは権威の奴隷となつて弱き者に圧力を加えるが、結局はそのために滅びる者である。ただ両者の異なる処は、作業場監督 M・D は最後までその権力を押し遣して悔いない頑固者であるか、レ・ミゼラブルのジャヴェールは遂にみずからの権威の崩壊の前に自己の虚無を悟つて、自殺せざるを得なくなる点に、人間味を感じさせることである。そう言えばジャン・ヴァルジャンもクロードに比較すると遙かに人間味があり偉大である。これは小説家ユゴーのやがての円熟がしからしめるものであるが、ともかくもレ・ミゼラブルの原型はこうして早くも小説クロード・グーの中に、否それに先立つ「死刑囚最後の日」の時から準備されていたのであり、クロード・グーもレ・ミゼラブルもそれぞれ別個の現実のモデルを持ちながら、人物の性格に類似点があるところにユゴーの小説作法上の問題があるのである。

批評家は以上に述べたようなモデルたる実在人物と小説に現れる登場人物との間に見る食い違いを強く非難する。なるほどもしこの小説を、処刑された死刑囚の死後の弁護とだけ考えて作者が書いたのであるならば、その非難は正しい。そしてユゴーが事件のほとぼりの未ださめぬ中に、明かに新聞記事に基きすべて実名を使って発表した以上、これはそ

の非難に値するかも知れない。しかし今一度小説を読み返して見、そして当時のユゴーが文学者として何を自己の使命と考えはじめていたか、つまりこの小説でユゴーが何を為したかったのかを考えて見るとき、この小説における人物の設定の仕方がするようにこの作品の欠点になるものかどうか再考を要する問題であると思われるのである。前述したようにロマンチック作家においては、その登場人物がともすれば作者の操り人形になりがちなのは否めない事実である。

この点でロマンチック小説が小説の本流に乗り得ないものであることも否めないが、当時はさておき、現在我々がこの小説をそのような見地からのみ非難することは当を得たものとは思えない。敢えて言うならば、ユゴーにとってその登場人物は操り人形となり終っても良かったのである。ユゴーはクロード・グー事件を取り上げた。彼はそれを利用したのである。それを利用して彼の吐き出すべき事を吐き出したかったのである。わずか三十数頁にみたぬこの一種のパンフレットが、真相なるものを調査して死人の弁護を長々と述べるためのものではあったとは考えられない。「死刑囚最後の日」により訴えんとしたことを補促し完成したかったユゴーが、一八三二年三月一九日の *Gazette* の

Oh! gouvernants, instruisez pour n'être pas obligés de tuer vos semblables.

という記事の一節に共鳴し、言うべき事を得て、それを僅かの日数で一気に纏めて為政者の頭上に叩きつけたものである。これを死後弁護の書とのみ考える時、いろいろな疑問が残るのであるが、ようやく社会と対決すべく立上ったユゴーの為政者への宣戦布告の第一弾と見るとき、この作品の意義は大きく取上げらるべきものとなってくる。

(附記・本稿では作中人物についてのみ述べたので、クロード・グー事件の真相については機会を見て稿を改め記述したい考えである)。

参考文献

P. Savoy-Casard : *Claude Guenx, édition critique*

- P. savey-Casard : Le crime et la peine dans l'œuvre de Victor Hugo, Presses Universitaires de France.
Le dernier jour d'un condamné, Claude Gueux, Albin Michel.
J.-B. Barrère : Hugo. Boivin.
P. Moreau et J. Boudout : Œuvres choisies de V. Hugo. Hatier.
E. Biré : V. Hugo après 1830. Librairie Perrin.
Victor Hugo raconté par un témoin de sa vie.